

5) 保健体育科

今年度、保健体育科では「防災について考える」というテーマで、保健科目でのAL型授業研究・実践を行った。

保健の授業においては、日頃からグループ活動の中での「言語活動」を多く取り入れることを意識している。しかし、教材は教科書や自作のプリントが中心となり、視覚的な情報に欠けていることが課題であった。そのため、本授業ではパワーポイントを使用し、視覚的な情報を多く提供し、より深く考えられるようにした。また、「正解のある問い」から「正解のない問い」へと発展させることで「最適解を見出す力」を付けられる授業展開を意識して実践を行った。

ア 実践報告

ア) 実践事例

日時：2018年10月22日(月) 1時間目 クラス：2年A組(自然科学コース38名)

単元名：「防災について考える」

ねらい：①防災についての正しい知識を身に付け、災害避難者にならないようにするにはどうしたらよいか考えられるようにする。

②災害時に最適解を見出せる力をつけさせる。

イ) テーマ設定について

今年度、各地域での豪雨災害、連日の酷暑、大型台風、地震など日本中が多くの自然災害に見舞われ、甚大な被害をもたらし、改めて自然の猛威を感じることとなった。災害はいつ、どこで、誰に起こるかはわからない。災害が起こってからでは手遅れであるにも関わらず、実際に自分の身近で起きたことでないと、自分のこととして捉えることは難しいのが現状である。東日本大震災後、人々の防災意識は高まり、各家庭で災害に備えて様々な準備をしていたが、今も継続して高い防災意識を持っているだろうか。どこか、「自分には関係ない」「自分は大丈夫」と考えてはいないだろうか。この機会に災害時の対応等について考え、もう一度自分の防災意識の見直しをすることが、生徒1人1人の命を守ることに繋がると思った。以上が今回の授業を設定した理由である。

ウ) 授業内容

保健という科目は、受験科目ではなく、さらには体育の授業とは違い座学であるために、高い学習意欲を持って授業を受ける生徒は少ない。しかし、自分自身の健康や命と向き合う機会が多く、実生活の中で必要な知識を学ぶことのできる教科である。1人でも多くの生徒が自分のこととして考え、興味を持てるような授業を展開することが必要である。

本授業では教科書は使わず、パワーポイントを使用したグループ学習を行った。2年A組の特徴も考慮し、視覚的な情報を多く提供し、イメージしやすいように工夫をした。また、生徒が考え、グループで話し合いしやすい様々な「問い」を用意することも意識した。



エ) 授業デザイン

教科	保健体育	科目	保 健	授業者	細 江 昌 子
実施日時	2018年10月22日 1時限		対象クラス	2年 A組 (38人)	
単元名	防災について考える				
㊦単元目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 防災についての正しい知識を身に付ける ・ なぜ防災が必要なのかを理解する ・ 防災を“自分のこと”として捉えられるようにする 				
㊦本質的な問い	<ul style="list-style-type: none"> ・ いま災害（特に地震・豪雨災害）が起きたら、自分の命を守ることができるか。 ・ 災害時に最適解を見出すにはどうしたらよいか。 ・ 災害の被害が最大化するのはどのような状況か。 ・ 災害避難民(者)にならないようにするにはどうしたらよいか。 				
㊦理解 重大観念と 誤解	<ul style="list-style-type: none"> ・ 災害時の判断には正解よりも最適解を見出す力が必要である。 ・ 災害は天災と人災が重なったときに被害が最大化する。 ・ 近年、自然災害の規模や回数が増えているのは偶然ではない。（因果関係がある） 				
㊦知識 ㊦技術	<ul style="list-style-type: none"> ㊦防災に関する正しい知識（例：天災・人災・災害避難民(者)・最適解） ㊦災害時に最適解を見つけて、行動することができる。 ㊦身の回りにある危険や不足を見つけ出しそれに備える行動をとることができる。 				
評価のための 証拠	パフォーマンス課題、テスト、小論文、振り返りシート、作品、生徒の応答、 生徒の質問、観察 その他 （〇×クイズ、クロスロードゲーム）				
ルーブリック	有（別紙） ・ 無				

1 各授業のテーマ（主となる学習活動の内容や問い等）

第1時の内容	減災力テスト1回目
第2時の内容	防災について知る。今の知識で、自分の命を守れるか。（本時）
第3時の内容	減災力テスト2回目

2 予習（有 ・ 無）

3 問いの構造



①つかみの発問 （導入の発問）	<ul style="list-style-type: none"> ・ あなたは災害が起きた際、生き延びることができるか。 （災害避難民(者)がどれくらいいるか、どれくらい長期化しているかも知る。）
②課題提示の 発問	<ul style="list-style-type: none"> ・ 災害避難民(者)にならないようにするにはどうしたらよいか。 （災害は天災と人災が重なったときに被害が最大化することに気付く。）
③思考拡散の 発問	<ul style="list-style-type: none"> ・ あなたの生活になくてはならないものは何か。 （“日常の当たり前” がなくなったらどんな生活になるのか考える。）
④思考焦点化 発問	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「大地震が起きました。この部屋のテレビは“机から落ちて割れる”か“ダイニングテーブルまで飛ぶ”などの選択問題や〇×クイズ。 （日頃から備えておくこと（備蓄・耐震等）の必要性に気付く。）
⑤思考深化の 発問	<ul style="list-style-type: none"> ・ 判断が難しい問題に直面したとき、どんな判断をするか。 （クロスロードゲーム形式）
⑥評価の発問及 び生徒の質問	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の身の回りにある危険や不足にはどのようなものがあるだろうか。 （自分を振り返り、今後活かせるようにする）

オ)「問い」について

○自分の生活になくてもならないものは何か？

・普段の生活の中で“あたりまえ”になっているもの程、無くなったら困ることに気付かせる。最近の高校生になくてもならないものは「スマホ」である。しかし、自分の生活や生きるということを考えて、もっと大切なものがあるということに気付く。またそれらを各家庭で備えておくことの大切さにも繋げる。

○クイズ形式の問いに答える

問題① 大地震が起きました。この部屋のテレビは… ①机から落ちて割れる ②ダイニングテーブルまで飛ぶ 	問題② 災害時、家族の安否を“災害用伝言ダイヤル”の番号に電話をかけなさい。 171	問題④ 気づいたら切り傷が。応急手当に使用して、紐やお皿、防寒グッズにも活用できる日用品といえば何？ ラップ 
問題③ “津波”を英語で言うと“ビッグウェーブ”である。 <input type="radio"/> or <input checked="" type="radio"/> X		

・これらのクイズには答えがある。内容は、個々の知識を試すものであるが、今回のメインである「正解のない問い」との違いに気付かせることが最大の目的である。

○正解のない問いに答える

・今回は、“クロスロード”という防災教育に使われるゲームから出題した。クイズとは違い、正解はない。生徒1人1人によって考え方が異なるため、様々な意見が出てくる。その意見をグループ内で交流し、様々な角度、様々な立場から考えることが目的である。このように、「正解のない問い」には、その場面、状況、立場、年齢、人数…等を考慮した上で「最適解」を見出す力が必要となる。この力が災害時、自分の命を守ることに繋がることに気付かせる。

カ) 研究授業における成果と課題

今回の研究授業では、様々な「問い」の中で、正しい知識を身に付けるだけでなく、自分に置き換えて考えることができること。災害に見舞われた際、冷静に最適解を見出せる力をつけさせることが最大の目標であった。普段の授業ではあまり活用しないパワーポイントを使用し、視覚的な情報を多く提供することで、イメージを持ちやすくし、自分に置き換えて考えてもらおうと考えた。

しかし、多くの情報を提示しなくても、生徒自身の経験や、テレビやインターネットを通してみたことのあるものなどから、こちらが思っている以上の情報を持っており、自分のこととして考えられることがわかった。こちらが多くの情報を提示しすぎることが逆に、生徒の考えや意見を阻害してしまうことになると痛感した。

ただし、生徒の情報や知識の中には誤ったものや偏ったものも多く、固定観念となってしまうことを防ぐ上でも、生徒の理解の正確な把握と適切な情報の精選が必要であると考えた。

問いに対して、意見を出し合ったり、予想を立ててみたりする力は生徒達には備わっている。大切なのは、その活動を引き出すための「問い」の工夫なのだと感じた。

(文責：細江)

イ 3年間のまとめ

ALの取組として、今年度は上記の通り保健の授業で研究・実践を行った。昨年まで2年間は実技科目体育（女子サッカー）において研究・実践を行った。以下に3年間の取組を振り返る。

1年目は、ALを意識しながら、「サッカーを知る」ことから始め、自分たちで課題を見つけて、身に付けたい能力やチームとしての目標を見つけることから行った。成果としては、映像を見て、視覚的にとらえ、チームの現状を仲間と共有することにより、課題や目標を明確にできたのではないかと考える。また、まずは「サッカーが楽しい！」と思えるようにするため、レクリエーション要素を含んだメニューを行ったことにより、アンケート結果からも「楽しかった」「関心が高まった」と答えた生徒が多かった。

反省点として、ALにとらわれすぎて、生徒間の話し合いの時間をとることにより、1時間の授業の中で、「運動量の確保」という点からは課題があった。

2年目は、1年目の反省点を意識し、運動量を確保しながらも、生徒間で自然に言語活動が多く出るような授業・練習メニューを計画し、展開した。その中で自ら課題を見出し、仲間と協力して克服できるようなメニューの提示が必要であると考えた。

成果として挙げられるのは、「生徒たちが自発的に仲間同士で問題解決の話し合いができていた」ことである。様々な練習メニューを行う場面で、仲間の動きを見ながら改善点を見出し、実践していこうとする姿が見られた。その結果、活動で行ったことを、ゲームで活用しようとする姿が見られるようになり、それができるようになると、「もっとうまくできるようになりたい！」という気持ちが出てくるようになった。そこから、「サッカー楽しい！！」という声や雰囲気が強くなっていったと感じる。

評価については、単元ルーブリックを作成し、グループノートと共有して取り組ませたことで、毎時の自身のレベルが確認でき、次の目標設定も行わせやすかった。

課題としては、「技能差」である。選択種目であり、全員サッカーに対する意欲は高いが、女子の中でもサッカーを経験している生徒もいれば、全く未経験で、なおかつボールを上手く扱うことが難しい生徒もいる。課題を理解はし、やろうとする姿勢も見られるが、なかなか上手いかない生徒に対して個々の対応ができなかった。チームスポーツであるがゆえに、集団に紛れ込ませてしまえばごまかせてしまうこともあるが、このような生徒も「できるようになりたい！」という意欲はある。仲間と協働させながらも、個々への対応を今後どうしていくべきかが課題となった。

今年度、保健で実施した、生徒の活動、最適解を導くための「問い」の工夫、昨年まで体育において実施した「運動量を確保しながらも、生徒間で自然に言語活動が多く出るような授業・練習メニュー」の工夫。保健における「問い」が体育における「メニューの工夫」になるのではないかと考える。どちらにおいても、生徒の習熟度や技能レベルを見極め最適な「問い」を研究・工夫していくことが授業の質・生徒のスキルアップにつながると考える。

(文責：丸山)